

C 調査部門・報告Ⅱ・英語教育関連の調査・アンケートの実施と分析

小学校英語教材 We Can! と中学検定英語教科書の ライティング活動の分析

研究者：北海道／ニセコ町立ニセコ中学校 教諭 中村 洋

《研究助言者：大友 賢二・和田 稔》

概要

本研究では、入門期にふさわしい書く活動について考察するため、英検 Can-do リストや CEFR-J との比較を行い、2018年度から新たに小学校で使われている We Can! で扱われる書く活動を分析した。あわせて、現行の中学校英語教科書の書く活動とも比較検討を行い、We Can! の活動レベルを考察した。本研究ではさらに、2018年度に We Can! を用いて小学校5、6年生の授業を担当した英語教員を対象にアンケート調査も行い、その結果を基に、小学校段階にふさわしい書く活動について検討した。結果、中学校英語教科書に掲載されている書く活動と同じ言語材料を使用する活動や、同等のテーマの活動が扱われていることから、We Can! で扱われる活動の内容や、そのレベルの高さが明らかになった。また、We Can! で扱われている書く活動は、分量的にはちょうど良いと考えているものの、内容的には難しいと捉えている小学校教員が多いことも明らかとなった。

1 はじめに

2020年度から本実施となる新学習指導要領で、小学校での英語教育が正式な教科として位置づけられた。また、英語を「読む」「書く」活動も初めて本格的に扱われることになる。文部科学省は、2015年度より、研究指定校用にアルファベット文字の認識を目的として作成した英語教材、Hi,

friends! Plus を発行していたが、2018年度からの2年間の移行措置及び先行実施を円滑に進めるべく、新たに We Can! を発行した。本研究では、入門期にふさわしい書く活動について考察するため、英検 Can-do リストや CEFR-J の汎用枠との比較を中心に、We Can! で扱われる書く活動を分析していく。この結果を、現行の中学校英語教科書の書く活動とも比較検討していく。また、本研究では2018年度に We Can! を用いて小学校高学年の英語指導を行った英語教員を対象にアンケート調査を行い、学習初期段階における書く活動として、どのような活動がふさわしいのかを検討していく。

2 調査の背景

小学校では、2018年度からの2年間で新学習指導要領の移行措置及び先行実施が行われているが、文部科学省検定済みの英語教科書はまだ発行されていない。その代わりとして、小学校3、4年生用の Let's Try! 1,2 および小学校高学年用の We Can! 1,2 が文部科学省より発行された。教科書ではないが、新しい学習指導要領に準拠して編集されており、全国の小学校で使用されている。そのため、実質的には小学校用の英語教科書といつてもよかろう。これらの教材の根拠となる2020年度からの新学習指導要領においては、「聞く」「読む」「話す」「書く」ことの言語活動を通じてコ

ミュニケーションを図る資質・能力の育成が強調されている(文部科学省, 2018)。ここでいう、言語活動とは、これまでの英語教育で扱われてきたコミュニケーションタスクの定義とほぼ同様であり(Willis & Willis, 2007; 白田他2009), 英語の授業の中では、コミュニケーションのためのタスクを充実させることができると考えられる。しかし、これまでに発行された中学校英語教科書に掲載されている活動は、言語形式の習得を目標としたドリル的な活動が多く、タスクを志向した活動が少ないことが指摘されている(山下他, 2017)。特に、書く活動に関しては、穴埋め式で短文を完成させるドリル的なものが多く掲載されるが、教科書ではこのような活動も1つの書く活動として分類されている。

これらを踏まえ、本研究ではまず、We Can!で扱われる書く活動について分析した中村(2018a, 2018b)の研究を発展させ、小学校段階に相応しい書く活動のレベルを考察する。そのため、これまで使用してきたHi, friends!(以下HF)では扱われない書く活動に焦点を当てて、We Can! 1,2 の特徴を分析していく。また、その特徴をより明確にするため、現行の中学校英語教科書も同様に分析していく。分析の枠組みとして、2001年に欧洲評議会によって作成されたヨーロッパ言語共通参考枠(CEFR)を基に、日本の英語教育での利用を目的に構築されたCEFR-Jの英語能力の到達度指標との比較を行う。CEFR-Jの指標は、「言葉を使って何ができるか」ということを文章で明示する, can do という能力記述子(descriptor: デスクリプタ)を用いて記述されている(投野, 2013)。CEFR-Jでは各言語能力をA2からC2までの6つのレベルに区分している。本研究では、これを基に、We Can!の書く活動を分類していく。本研究ではまた、日本人初級学習者の実態に即した分析ができるよう、英検Can-doリストとの比較も行っていく。英検Can-doリストとは、「英検の各級合格者が『英語でどのようなことができると考えているか(自信の度合い)』ということをアンケート調査に基づいて、統計的な分析を行ってまとめたもの」である(日本英語検定協会 online)。

続いて、本研究では、2018年度に実際にWe Can!を用いて小学校高学年の英語指導を行った全国の英語教員を対象にアンケート調査を行い、

学習初期段階における書く活動として、どのような活動がふさわしいのかを考察していく。教員の経験や児童の実態などの影響を最小限にするため、特定の学校や地区に偏るのではなく、全国の英語教員を対象に調査を行っていく。また、書く活動だけではなく4技能すべてを調査の対象とすることで、書く活動に特化した課題があるのか否かも検討していく。

3 調査方法

3.1 We Can! の活動に関する調査

本研究では、学習初期段階における効果的な文字指導を考察するため、We Can!に掲載されている活動を、まず「聞く」「話す」「読む」「書く」の分野毎に整理していく。続いて、文字を書く活動の中でも、英語を用いて書く活動をリストアップし、分析の対象とする。また、小学校と中学校の英語教育の効果的な連携を推進するため、現行の中学校英語教科書に掲載されている書く活動も分析していく。中学校英語教科書に関しては、一部を穴埋めして単文を完成させるような単純なドリル形式のものは除外して、2文以上で表現する、情報の伝達を重視した活動のみを分析の対象とする。これらを、英検Can-doやCEFR-Jの汎用枠と比較し、各活動の内容やレベルを分析していく。

3.2 We Can!を用いて指導した教員を対象とした意識調査

移行期間の1年間が経過した2019年3月に、小学校5, 6年生の英語教育に定期的に関わっている教員を対象にした調査を実施した。

調査タイトル 小学校英語教育に関するアンケート

調査期間 2019年3月8日(金)~3月9日(土)

調査対象 定期的に小学校5, 6年生の英語教育に携わっている教員(担任、専科、TT担当教員等)

調査方法

- ・インターネットリサーチ(調査会社)を活用した選択式調査(5件法)
- ・予備調査103名(小学校5,6年生の英語教育でWe Can!を使用しているか否か)
- ・本調査62名(予備調査でWe Can!を継続使用して授業を行っていると回答した教員)

調査人数

4 結果と考察

4.1 We Can! の活動に関する調査の結果

4.1.1 We Can! の活動の特徴

We Can! 1, 2ともに、活動が掲載された本編に加え、巻末には、中学校教科書のようなアルファベット順とは違う、学校の教科や職業、国名など、

カテゴリー毎に分類された語彙リストが掲載されている。さらに、それぞれの語彙のイラストが掲載された切り取り用の単語カードも用意されている(表1)。

移行期間では、従来から使用されているHFも併用し、年間50時間で指導を行うことが基本とされている。ページ数だけを取り上げると、現行のある出版社の中学校英語教科書では、全学年共に年間140時間で扱う総ページ数が151ページ(内、巻末の語彙リストが19ページ)であることと比較し、相当なボリュームであるといえる。また、扱われている語彙数に関しては、2020年度版の学習指導要領で、小学校で扱う語彙の総数は「中学校の外国語科の学習の土台として十分である600~700語程度」とされている。We Can! 同様、文部科学省が小学校3, 4年生向けに作成した教材、Let's Try! 1, 2に掲載された語彙数も調べた結果、4年間の合計では669語となり、学習指導要領が示す語彙数と一致していることが明らかとなった(表2)。

■表1: Hi, friend! 1, 2及びWe Can! 1, 2のページ数

	本編ページ数	語彙リストページ数	単語カード
Hi, friend!1	40	—	15
Hi, friend!2	40	—	15
We Can!1	73	22	16
We Can!2	73	22	16

■表2: Let's Try! 及びWe Can! で扱われる語彙数

	Unit 1	Unit 2	Unit 3	Unit 4	Unit 5	Unit 6	Unit 7	Unit 8	Unit 9	合計
Let's Try! 1	7	10	38	27	25	38	17	11	22	195
Let's Try! 2	3	41	14	17	14	17	10	23	11	150
We Can! 1	15	53	16	10	23	29	20	36	12	214
We Can! 2	2	16	5	18	16	14	11	17	11	110

中村(2018a)

次に、We Can! で扱われる活動を、見出しを基に分類した(表3)。その結果、書く活動であることが明示されているLet's read and writeに分類されたのは、We Can! 2に掲載された10の活動のみであった。しかし、We Can! の指導書の内容も検討し、実際に授業で行われる活動の内容を検討した結果、We Can! 1では38、We Can! 2では56もの書く活動が用意されていることが

わかった。そのうち、次期学習指導要領から初めて扱われることになる英語で書く活動は、We Can! 1では4、We Can! 2では13であった。しかし、指導書を詳細に読み取ると、それ以外の書く活動の中にも、指導書の解答例では日本語で記述されているものの、身近な英単語を活用することで、英語で解答できるものも含まれていることがわかった。これらを効果的に扱うことでの例えは

児童一人一人のレベルに応じて日本語と英語を使い分けて書かせることや、授業の進度に余裕がある場合には、初めは日本語で書かせ、学習がすすんだ後に再度英語で書かせることもできるも

のと考えられる。

We Can! に掲載されている英語で書く活動の内容に着目すると、「先生のできることを予想して書く活動」、「自己紹介を単語の穴埋めで完成

■表3: We Can!で扱われる活動の分類

<We Can! 1>

	Let's watch and think	Let's listen	Let's play	Let's sing	Let's chant	Let's talk	jingle	Let's read and write	activity	story time	書く活動 (英語で書く活動)
U1	2	3	3						1	1	7(1)
U2	6	2	1						2	1	6(1)
U3	3	1	1	1			1		2	1	5(1)
U4	2	3	3						1	1	3
U5	2	3	2				1		5	1	5(1)
U6	5	1	1				1		1	1	3
U7	1	4	4		1				1	1	1
U8	2	5					1		1	1	3
U9	1	5	2		1				2	1	5
計	24	27	17	1	2	0	4	0	16	9	38(4)

<We Can! 2>

U1	1	3	4						1	1	5(1)
U2	6	2	2	1	1			1	1	1	7(1)
U3	3	2	3						1	1	4(2)
U4	2	3	3					1	2	1	6(1)
U5	2	3	1		1			2	1	1	3(1)
U6	5		2		1			2	2	1	6(2)
U7	4	3	1			1		1	1	1	8(2)
U8	4	1	1		1			2	1	1	8(2)
U9	5	4	1		1			1	1	1	9(1)
計	32	21	18	1	5	1	0	10	11	9	56(13)

中村(2018a)

■表4: We Can! 1の書く活動一覧と中学校で扱われる学年の比較

		中学校A社	中学校B社	中学校C社
U1	単語で自己紹介	1	1	1
U2	バースデーカード	1		1
U3	時間割を作成	1		1
U4				
U5	先生のできることを予想			
U6	お奨めの国を紹介し合う			
U7	宝物さがし			
U8				
U9	自分のヒーロー紹介	1	1	1

させる活動」、「自分の将来の夢を紹介するスピーチ原稿を作成する活動」などが掲載されている。これらの活動で中心となる言語材料は、それぞれ助動詞can, 一般動詞, 不定詞名詞的用法及び動名詞である。これらの言語材料を現行の各社の

中学校英語教科書に当てはめると、自己紹介文は中学校1年生の夏休み前後で扱われている。不定詞や動名詞は中学校2年生の夏休み前後に扱われることが多い(表4, 5)。

■表5: We Can! 2の書く活動一覧と中学校で扱われる学年の比較

		中学校A社	中学校B社	中学校C社
U1	自己紹介	1	1	1
U2	日本紹介	3	3	3
U3	名前を当てる			
	表を完成させる	1	1	1
U4	町紹介	2	3	2
	町のポスター作成			
U5	夏休みの思い出	2	2	2
U6	オリンピックの観戦計画			
	見たい競技を書く	2	2	2
U7	思い出のアルバムを作る	1	1	1
	小学校の思い出	3	3	3
U8	将来の夢	2	2	2
U9	中学校生活に向けて	2	2	2

4.1.2 CEFR-Jとの比較結果

We Can! に掲載されている英語を書く活動を整理した表4, 5を基に、CEFR-Jの指標との比較を試みた(グラフ1)。結果、We Can!1では基礎的な活動が十分に扱われていることや、We Can!1から2へと段階を踏んで活動の内容が高度化していることが読み取れた。一方で、現行の中学校の教科書と比較すると、We Can!2では、中学校2, 3年生レベルに相当する活動も扱われていることも明らかとなった(グラフ2)。加えて、中学校の年間の授業時間が各学年で140時間、小学校では5, 6年生ともに50時間であることを比較すると、書く活動が追加的に扱われるようになった小学校では、綿密な授業計画の基、効率よく授業を進めていく必要があると考えられる。復習に割く時間があまり確保できないことも想定される。

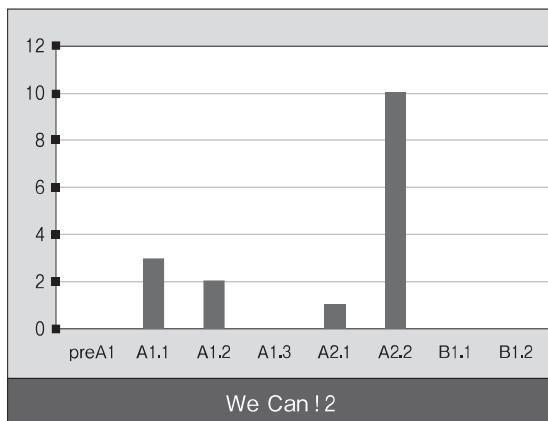
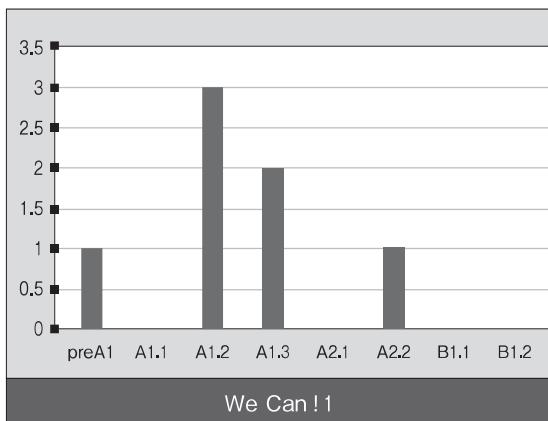
中学校の教科書においても段階的に学習内容が高度化していることが読み取れる。一方で、例

えば中学校1年生の前半で、be動詞や一般動詞を学習したのちに自己紹介を英文で書く活動が用意されているが、これは小学校外国語活動が始まる前と同様である。しかし、小学校外国語活動の導入や、文字指導が本格的に始まったことを受け、今後は中学校での活動の内容が大きく変わり、難化することも予想されよう。

4.1.3 英検Can-doとの比較結果

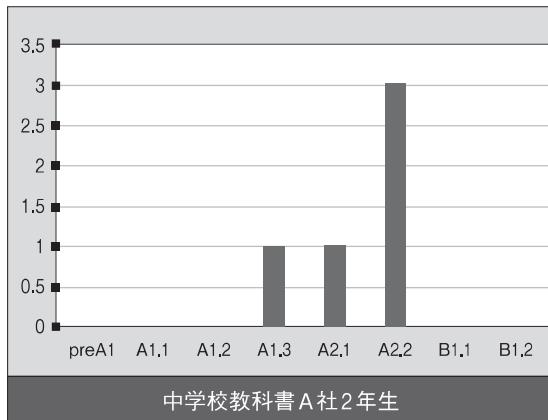
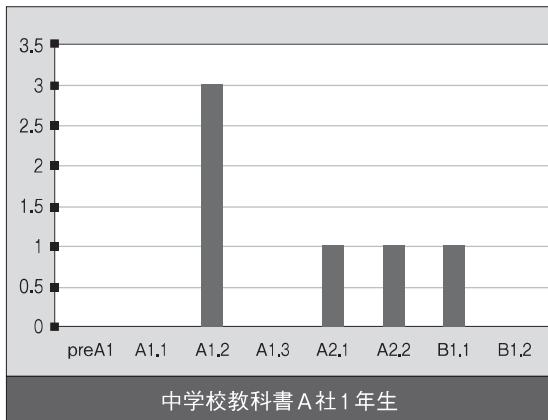
次に、We Can! の英語を書く活動を英検Can-doとも比較を行った(グラフ3)。こちらの比較でもCEFR-Jとの比較同様に、We Can!1では基礎的な活動が行われていること、We Can!1から2へと次第に学習の内容が高度化していることがわかった。中学校の英語教科書も同様に、段階的に活動のレベルが上がっていることが読み取れる(グラフ4)。しかし、活動のレベルを比較すると、ここでも、We Can!2では、中学校2, 3年生レベル、もしくはそれ以上に相当する活動も扱われていること

■グラフ1: We Can! とCEFR-Jの比較

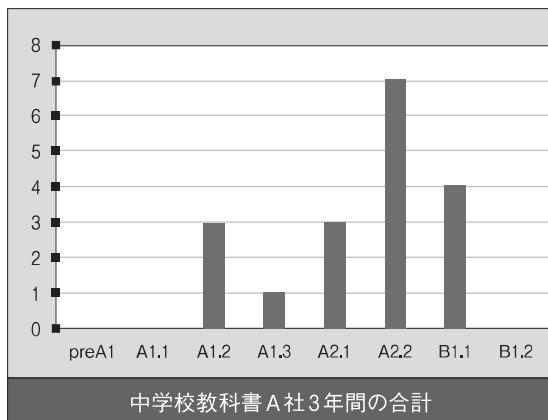
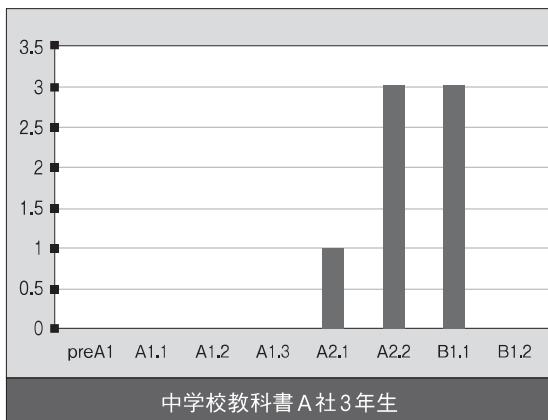


中村(2018b)

■グラフ2: 中学校英語教科書とCEFR-Jの比較



中村(2018b)



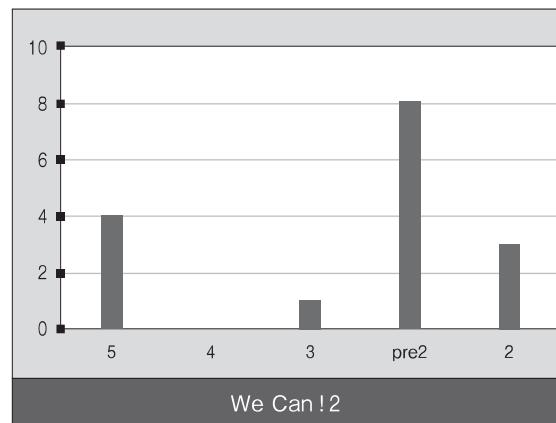
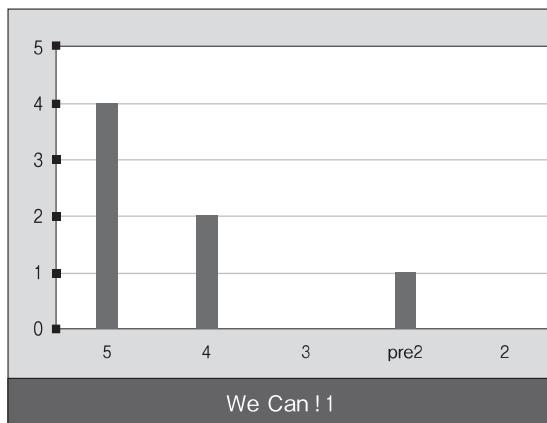
中村(2018b)を基に作成

も明らかとなった。もちろん、扱われる語彙数やレベルには違いがあるが、あくまで活動のテーマに着目した場合、中学校と同様のテーマで活動に取り組むことになる。We Can! を用いた小学校での授業では、使用できる語彙に大きな制限があり、そのため、中学校以上に「伝えたいことを英語でうまく表現できない」という状況が生じることが考えられる。これを本格的な英語学習が始まると

中学校での学習に向けた意欲の喚起へと繋げていくことが小学校段階での課題であるだろう。

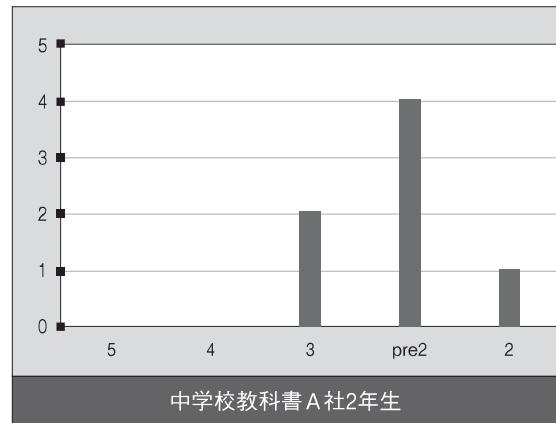
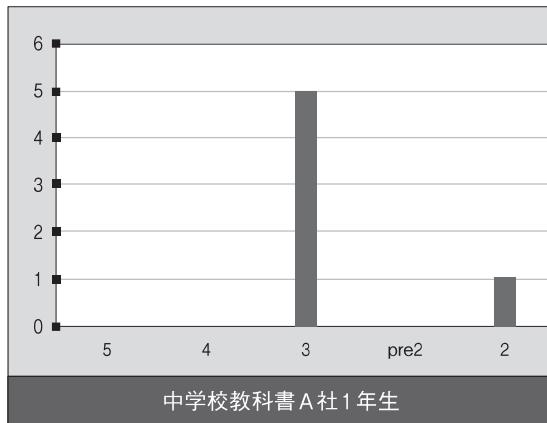
英検 Can-do のレベルや CEFR-J の指標と比較すると、英語辞典の使用が一般的に行われている中学校とは違い、We Can! では、語彙力が限られている中、かなり高度なテーマの英作文に取り組ませているという現状にある。辞書がなく We Can! と HF の教材がすべてである小学校におい

■グラフ3: We Can! と英検Can-doとの比較

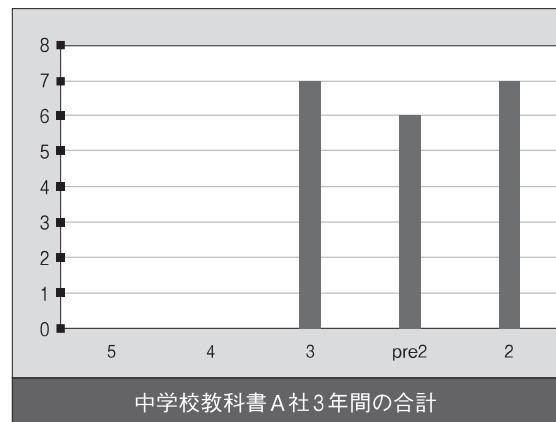
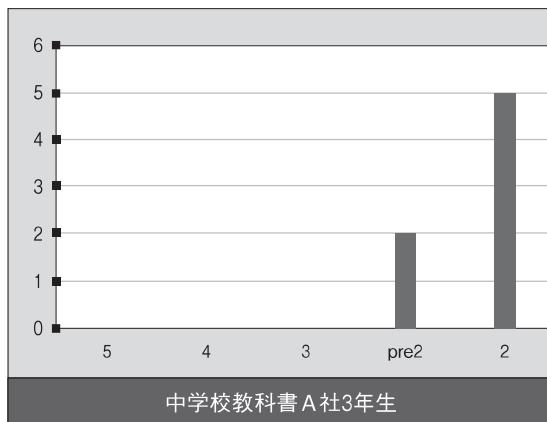


中村(2018b)

■グラフ4: 中学校英語教科書と英検Can-doの比較



中学校教科書 A社2年生



中村(2018b)を基に作成

では、児童の興味を引くため、いろいろなテーマに取り組ませることは必要だが、限られた語彙力の中では、かなりの無理が生じることも想像に難くない。これは児童だけではなく、教える側の教員にも当てはまるのではないだろうか。もちろん、この「自分の言いたいこと、書きたいことが英語でうまく表現できない」という気持ちを持続させることで、中学校段階での英語学習に対する意欲

の向上に繋げることも可能である。しかし、授業での扱い方や児童からの個別の質問に対する対応次第では、「英語がわからない」「英語は難しい」という意識にも繋がってしまう恐れがある。これを未然に防ぐためにも、小学校と中学校の教員が双方の学習内容をしっかりと把握することや、協力体制を構築することがこれまで以上に強く求められると言えよう。

4.2 We Can! を用いて指導した教員を対象とした意識調査の結果

4.1で明らかとなったWe Can! の特徴を、実際に授業でWe Can! を使用している小学校教員はどのように捉えているのだろうか。本研究ではまず、We Can! の使用の有無を明確にするために、本調査に先立ち、全国の小学校教員103名を対象としてWe Can! を継続して授業で活用したか否かについての予備調査を行った。結果、60.2%の62名がWe Can! を授業で用いたことがわかった。本研究では、この62名を対象にWe Can! を授業で使用した上で明らかになった成果や課題についての調査を行った。

4.2.1 We Can! に掲載された活動の分量に関して

本研究においては、書く活動のレベルを相対的に明らかにするため、書く活動だけではなく、4技能それぞれに関して同様の質問項目で調査を行った。まず、We Can! で扱われる活動の分量に関してである(表6)。「話す」「聞く」主体に扱うHFとの併用で、小学校5、6年生とともに年間50時間で扱うことが基本とされているが、本調査の結果では、半数以上の教員が4技能ともにちょうどいい分量であると回答している。また、HFを併用するためか、「聞く」「話す」の分量が多いと答えた回答の合計が、「読む」「書く」よりも若干多くなった。一方で、We Can! で新たに扱われることになった「読む」「書く」に関しては、60%以上がちょうどいい分量だと答え、「やや少ない」「少ない」を合わせると約70%の教員がWe Can! の活動を十分に授業で扱えていると考えられる。

■表6: We Can! に掲載された活動の分量に関する

(n=62)

	聞く		話す		読む		書く	
	n	%	n	%	n	%	n	%
かなり多い	4	6.5	7	11.3	5	8.1	2	3.2
やや多い	19	30.6	17	27.4	12	19.4	16	25.8
ちょうどいい	35	56.5	32	51.6	39	62.9	38	61.3
やや少ない	3	4.8	4	6.5	6	9.7	3	4.8
かなり少ない	1	1.6	2	3.2	0	0.0	3	4.8

4.2.2 We Can! に掲載された活動の難易度に関して

分量同様、難易度に関しても4技能すべてについて調査を行った(表7)。結果、すべての技能に対して、「やや簡単」「かなり簡単」との回答がごく僅かなものに対し、「話す」「書く」のアウトプットに関する技能で、40%超が「かなり難しい」「やや難しい」と回答した。この理由として考えられるのが次の2つである。まず、「4.1 We Can! の活動に関する調査の結果」で検討したように、扱われている活動自体の難易度が高いことが考えられる。求められている語彙数や書くべき分量には違いがあるとはいえ、テーマ的には現行の中学校2、3年生と同様のものが扱われている、使用すべき言語材料も不定詞や動名詞などが含まれている。これらが、難しいという回答につながった

大きな要因であると考えられる。

次に考えられるのが、年間50時間という限られた時間でWe Can!, HFの両方を扱わなければならぬことである。さらに、初めての文字を「読む」「書く」ことに対し、児童だけではなく、教える側の教員も手探り状態で、場合によっては困難を伴いながら指導にあたっていることも予想されよう。前述のように、小学校段階での「今の時点では自分の言いたいこと、伝えたいことが英語でうまく表現できない」という児童の思いをうまく持続させ、中学校段階での英語学習に対する意欲の向上に繋げることが不可欠である。しかし、授業での扱い方によっては「英語は難しい」「英語はわからないから嫌いだ」ということになりかねない。つまり、諸刃の剣ということである。

これらの解決のためには、2020年度からの新学

習指導要領の完全実施までに、We Can!を使用して指導に当たった移行期間の成果と課題について議論が積極的に行わなければならない。また、2020年度からは各教科書会社が編集した文部科学省検定済みの英語教科書が使用されることになる。現在は全国一律でWe Can!が使用されているため、詳細にわたって情報の共有を行いやすいが、今後は地域や学校により使用する教材が異なるために、現在のように容易に情報の共有ができなくなることも予想される。さらには、これから2026年度までは、外国語学習の開始時期が小学校3年生、4年生の児童が混在することになる(表8)。小学校5、6年生での教科としての英語の授業を受けた年数や、使用した教材がWe Can!なのか、検定教科書なのかという違いも考慮に入れた指導が求められる。小学校の教員だけではなく、受け入れ側である中学校教員もこのことに十分に

配慮しながら授業を行っていく必要が生じる。

本研究においては、移行期間の1年目が終了した時点でのアンケート調査を基に、We Can!に関して議論を行ってきたが、小学校、中学校ともに、毎年のように違う教材、内容で学習した児童・生徒を指導することになる。また、中学校の教科担任制とは違うため、小学校で英語を指導する担任教員が、どの年度にどの学年で英語指導に関わったかによっても、教員の英語教育や英語教材に対する意識に差が生じる要因になることが予想される。今後も、本研究と同様の調査を継続し、教員の英語指導の経験によって教材に対する意識の差異が生じるかについても、あわせて研究を進める必要がある。

■表7: We Can!に掲載された活動の難易度に関して

(n=62)

	聞く		話す		読む		書く	
	n	%	n	%	n	%	N	%
かなり難しい	2	3.2	2	3.2	3	4.8	5	8.1
やや難しい	21	33.9	26	41.9	14	22.6	20	32.3
ちょうどいい	36	58.1	30	48.4	41	66.1	34	54.8
やや簡単	3	4.8	3	4.8	4	6.5	3	4.8
かなり簡単	0	0.0	1	1.6	0	0.0	0	0.0

■表8: 各学年段階における小学校外国語活動・英語授業の年間の履修時間及び利用教材

2018年度(小学校で移行期間開始)

小学校3年	小学校4年	小学校5年	小学校6年	中学校1年	中学校2年	中学校3年
小3:15	小3:	小3:	小3:	小3:	小3:	小3:
小4:	小4:15	小4:	小4:	小4:	小4:	小4:
小5:	小5:	小5:50	小5:35	小5:35	小5:35	小5:35
小6:	小6:	小6:	小6:50	小6:35	小6:35	小6:35

※小学校5、6年生でHF及びWe Can!を併用

※中学校1年生はHFを使用した外国語活動を経験した生徒

2019年度

小学校3年	小学校4年	小学校5年	小学校6年	中学校1年	中学校2年	中学校3年
小3:15	小3:15	小3:	小3:	小3:	小3:	小3:
小4:	小4:15	小4:15	小4:	小4:	小4:	小4:
小5:	小5:	小5:50	小5:50	小5:35	小5:35	小5:35
小6:	小6:	小6:	小6:50	小6:50	小6:35	小6:35

※小学校5、6年生でHF及びWe Can!を併用

※中学校1年生はHF及びWe Can!を使用した英語教育を経験

2020年度(小学校で新学習指導要領本格実施)

小学校3年	小学校4年	小学校5年	小学校6年	中学校1年	中学校2年	中学校3年
小3:35	小3:15	小3:15	小3:	小3:	小3:	小3:
小4:	小4:35	小4:15	小4:15	小4:	小4:	小4:
小5:	小5:	小5:70	小5:50	小5:50	小5:35	小5:35
小6:	小6:	小6:	小6:70	小6:50	小6:50	小6:35

※小学校5,6年生は検定教科書を使用

※中学校1年生はHFとWe Can!を使用した英語教育を経験

2021年度(中学校で新学習指導要領本格実施)

小学校3年	小学校4年	小学校5年	小学校6年	中学校1年	中学校2年	中学校3年
小3:35	小3:35	小3:15	小3:15	小3:	小3:	小3:
小4:	小4:35	小4:35	小4:15	小4:15	小4:	小4:
小5:	小5:	小5:70	小5:70	小5:50	小5:50	小5:35
小6:	小6:	小6:	小6:70	小6:70	小6:50	小6:50

※小学校5,6年生は検定教科書を使用

※中学校1年生は小学校5年生でHFとWe Can!を併用。6年生で検定教科書を使用

2022年度

小学校3年	小学校4年	小学校5年	小学校6年	中学校1年	中学校2年	中学校3年
小3:35	小3:35	小3:35	小3:15	小3:15	小3:	小3:
小4:	小4:35	小4:35	小4:35	小4:15	小4:15	小4:
小5:	小5:	小5:70	小5:70	小5:50	小5:50	小5:50
小6:	小6:	小6:	小6:70	小6:70	小6:70	小6:50

※小学校5,6年生は検定教科書を使用

※中学校1年生は小学校5,6年生で検定教科書を使用

2023年度

小学校3年	小学校4年	小学校5年	小学校6年	中学校1年	中学校2年	中学校3年
小3:35	小3:35	小3:35	小3:35	小3:15	小3:15	小3:
小4:	小4:35	小4:35	小4:35	小4:35	小4:15	小4:15
小5:	小5:	小5:70	小5:70	小5:50	小5:50	小5:50
小6:	小6:	小6:	小6:70	小6:70	小6:70	小6:70

※小学校5,6年生は検定教科書を使用

※中学校1,2年生は小学校5,6年生で検定教科書を使用

2024年度

小学校3年	小学校4年	小学校5年	小学校6年	中学校1年	中学校2年	中学校3年
小3:35	小3:35	小3:35	小3:35	小3:15	小3:15	小3:
小4:	小4:35	小4:35	小4:35	小4:35	小4:15	小4:15
小5:	小5:	小5:70	小5:70	小5:50	小5:50	小5:50
小6:	小6:	小6:	小6:70	小6:70	小6:70	小6:70

※小学校5,6年生は検定教科書を使用

※中学校1,2年生は小学校5,6年生で検定教科書を使用

2025年度

小学校3年	小学校4年	小学校5年	小学校6年	中学校1年	中学校2年	中学校3年
小3:35	小3:35	小3:35	小3:35	小3:35	小3:35	小3:15
小4:	小4:35	小4:35	小4:35	小4:35	小4:35	小4:35
小5:	小5:	小5:70	小5:70	小5:70	小5:70	小5:70
小6:	小6:	小6:	小6:70	小6:70	小6:70	小6:70

2026年度

小学校3年	小学校4年	小学校5年	小学校6年	中学校1年	中学校2年	中学校3年
小3:35						
小4:	小4:35	小4:35	小4:35	小4:35	小4:35	小4:35
小5:	小5:	小5:70	小5:70	小5:70	小5:70	小5:70
小6:	小6:	小6:	小6:70	小6:70	小6:70	小6:70

5 結論と今後の課題

本研究では、CEFR-J と英検 Can-do という2つの指標を基に、We Can! と中学校英語教科書で扱われる書く活動のレベルを測定した。その結果、中学校英語教科書に掲載されている書く活動と同じ言語材料を使用する活動や、同等のテーマの活動が扱われていることから、We Can! で扱われる活動の内容や、そのレベルの高さが明らかになった。本研究の成果の1つ目として、英検 Can-do という身近なリストとの比較により、わかりやすい形で We Can! で扱われる活動について分析できた点を挙げたい。

本研究で明らかとなった We Can! のレベルだが、これは2020年度から始まる新しい学習指導要領での小学校英語教育の姿を映したものもある。これに伴い、学習指導要領が改訂される2021年度以降の中学校英語教科書では、より一層高度な英語を使用する活動が扱われることになる。しかし、表8にまとめたように、今後数年間は、制度面の理由により小学校卒業段階での英語学習の経験に差異が生じることになる。受け入れ側である中学校教員もこのことをしっかりと把握したうえで、中学校1年生の授業を行わなければならない。中学校では2021年度以降の数年間は同じ英語教科書を使用することになるが、バックグラウンドが異なる生徒が入学してくるため、特

に中学校1年生における授業内容、指導方法を綿密に計画する必要が生じる。このために、研修の機会や最新の情報の提供が不可欠になるだろう。今後も、各社の小学校教科書の内容が明らかとなった時点で、再度、活動の内容やレベルを分析していく。そして、わかりやすく目に見える形で小学校の英語教育の学習内容について提示していきたい。

本研究の2つ目の成果として、実際に We Can! を使用して1年間に小学校での英語教育に関わった教員からのフィードバックを得られたことである。しかしながら、今後数年間は、小学校、中学校ともに、毎年のように違う教材、内容で学習した児童・生徒の指導にあたることになる。特に2020年度からは初となる小学校英語教科書を使用した授業も開始される。そのため、より密接な小学校と中学校の連携の構築のためにも、これからも、現場で指導にあたる教員を対象としたアンケート調査が必要不可欠と考える。今後も調査を継続し、その成果や課題を教員に還元することで、日々の授業の改善につなげていく。しかし、全国一律で We Can! が使用されている現状から一步進み、今後は各社の教科書を使用した授業が行われる。使用する教科書の違いによる課題も生じることが予想される。各社の教科書の分析同様、意識調査も継続することで、小学校の英語教育の成果と課題を明らかにしていきたい。加えて、実際に小学校で教科としての英語教育を受けてきた生徒を対象としたアンケート調査や、今

後数年間にわたり、毎年違う教育課程で学習した生徒を受け入れる中学校教員を対象としたアンケート調査も実施することで、小学校英語教育の成果と課題について多角的に明らかにしていきたい。

文部科学省は、「小・中・高等学校を通じた英語教育強化事業」の一環として、2020年度を待たずしてWe Can!を発行し、2018年度から移行期間として教科としての小学校英語教育を推進してきた。また、文部科学省は2014年からの5年間で「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」に取り組んできた。イギリス政府により設立された公的な国際文化交流機関であるブリティッシュ・カウンシルとの連携で、各地の中核教員を対象とした中央研修を実施し、英語教育推進リーダーとして認定してきた。この中央研修の後、英語教育推進リーダーが講師を務め、全国の英語教員が悉く受講するカスケード形式の研修も全国で継続された。2018年度末ですべての中学校と高等学校の英語教員が同じ内容の研修を受けたことになる。小学校においても、同じく推進リーダーを養成し、全国のすべての小学校から最低1人はカスケード形式の研修に参加したことになる。しかし、同じ「小・中・高等学校を通じた英語教育強化事業」の1つとして発行されたWe Can!であ

るが、小学校教員向けのカスケード研修の内容については、We Can!が目指しているものと方向性は等しくても、研修内容自体は特段We Can!を用いた指導を前提としたものではなかった。同じくまた、中学校教員向けのカスケード研修には、小学校と中学校の連携を扱うレッスン項目も用意されてはいなかった。今後は、小学校、中学校双方の教科書が新しくなることも踏まえ、今後は一人ひとりの教員や各学校独自の研修だけに頼るのでなく、市町村教育委員会や都道府県教育委員会が中心となった研修の設定や情報の提供が重要になる。また、教科書出版社からの新しい教科書の詳細な説明や、教員向け指導書の内容の充実なども急務となる。

謝辞

本研究の機会を与えてくださった公益財団法人 日本英語検定協会の皆さま、選考委員の諸先生方、とりわけ、本論文作成にあたりご指導・ご助言をしていただいた大友賢二先生、ならびに和田 稔先生に深く感謝申し上げます。また、調査にご協力いただいた全国の小学校で熱心に英語教育に取り組んでいる先生方に厚くお礼申し上げます。

参考文献(*は引用文献)

- * 文部科学省.(2018).「小学校学習指導要領解説 外国語活動・外国語編」.東京:開隆館出版.
- * 中村洋.(2018a).「新学習指導要領での文字指導を念頭にした小学校英語教材と中学検定教科書のライティング活動の分析」.第44回全国英語教育学会京都研究大会予稿集, pp. 132-133.
- * 中村洋.(2018b).「中学校で伸ばしたい『書く力』」: We Can! での学習をどう発展させていくか」.『英語教育』2018年12月号, pp.24-25.
- * 日本英語検定協会.「英検Can-doリスト」. <https://www.eiken.or.jp/eiken/exam/cando/> (2019年5月1日閲覧)
- * 投野由紀夫.(2013).「CAN - DO リスト作成・活用 英語到達度指標CEFR - Jガイドブック」.東京:大修館書店.

- * 白田悦之・志村昭暢・横山吉樹・山下純一・中村洋. (2009).「教科書におけるスピーキング活動のタスク性に関する分析—中学校英語教科書の場合—」. *HELES Journal*, IX, pp.17-32.
- * Willis, D. & Willis, J. (2007).*Doing Task-based Teaching*. Oxford: Oxford University Press.
- * 山下純一・志村昭暢・白田 悅之・竹内典彦・河上昌志・照山秀一・中村洋・小山友花里・沢谷佑輔・横山吉樹・萬谷隆一.(2017).「タスク性から見た中学校英語教科書のコミュニケーション活動について」. *HELES Journal*, 16, pp.19-34.